

サワラ種苗の中間育成と放流を行いました

瀬戸内海のサワラ漁獲量は、昭和61年の6,378トンピークに激減し、平成11年にはわずか199トンにまで減ってしまいました。そこで平成14年に「サワラ瀬戸内海系群資源回復計画」が策定され、禁漁期間の設定や漁具の目合の拡大、受精卵放流等の取組みが行われています。その成果もあり、平成27年には2,518トンまで回復しています。その取組みの一つとして行っているサワラ種苗の中間育成と放流を今年度も実施しました。

瀬戸内海区水産研究所屋島庁舎(香川県高松市)の陸上水槽で卵から育てられた稚魚は、瀬戸内海沿岸の各県に配付され、各地で中間育成が行われます。例年、岡山県では備前市日生町地先の海上に設置した生け簀で中間育成を行っており、今年度は6月6日に平均全長42.4mmのサワラ稚魚約10,000尾を1トンタンク4槽を用いて、漁船で移送しました(写真1)。

サワラは生まれながらにして立派な歯が生えて

おり、小さいながらもそのどう猛さを伺い知ることができます。基本的に生きている仔稚魚を食べることで成長しますが、餌が少なくなると共食いをするため、絶えず餌を与える必要があります。放流するまでの1週間、日生町漁協の漁業者や職員らが、日の出から日没まで餌となるイカナゴシラスを30分から1時間おきに与えました(写真2)。元気いっぱいな稚魚たちはそれでもなお共食いを起こしてしまい、改めてサワラのどう猛さや、育てることの難しさを実感しました。

1週間後の6月13日には平均全長69.9mmに成長した稚魚約5,400尾を日生町地先に放流しました(写真3,4)。日生の海で育ったサワラが、やがて外海へ繰り出し、再び大きくなって戻ってきて瀬戸内に春を告げてくれることを願っています。

(資源増殖室 仲村)



写真1 サワラ種苗の移送



写真3 中間育成後の放流



写真2 生け簀での餌やり



写真4 育成開始時(左)と放流前のサワラ(右)